

2015 年第 4 回定例研修会報告

滋賀森林インストラクター会

日 時 2015 年 11 月 1 日（日）
場 所 湖南アルプス自然休養林（金勝山系）
馬頭観音～竜王山～天狗岩～国見岩～馬頭観音
参加者 小西、佐々木、高橋、平田、吉井（みなくちこどもの森）

内 容 栗東市街から車で一気に、海拔 590m の馬頭観音堂の駐車場まで上ると、J R A
栗東のトレセンがはるか下に、近江富士も見下ろす素晴らしい眺望が広がって
います。空は快晴ですが、冷気が体を包み込み肩に力が入ります。
歩いたら暖まるだろうと、早速研修の開始です。

＊

金勝山系も田上山同様、風化と浸食の激しい花崗岩からなる山系で、100 年前ま
では禿山であった所。植生は典型的なアカマツ林で、コナラ、ソヨゴ、リョウブ、
タカノツメ、アセビ、ネジキ、ヒサカキ等。

下草はミヤコザサが繁茂。シカの喰い跡が所々にみられます。

＊

以下、行程に従って進みます。

馬頭観音から少し山道を進むと、
このように曲がりくねった低木が。

アセビの群落です。シカの食害が
ないので、自由奔放に育った？



薄暗い森を抜けると、快適な尾根道
に。金勝では、この標高でもミズナラ
が所々見られ、少し色づいた葉が青空
に映えてきれいです。



リョウブは、シカによる
皮剥ぎ被害が顕著。



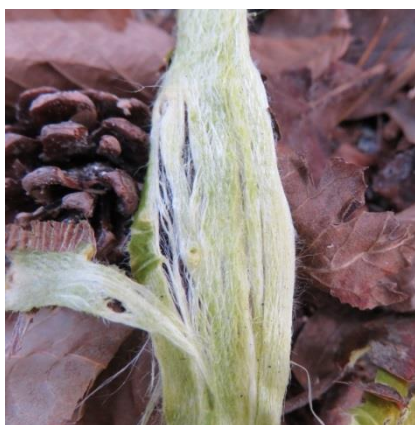
ミヤコザサ
この食痕は
シカ？



こちらの食痕は
ノウサギ？



ガンピの皮



ガンピの繊維

*

湖南アルプス一帯はガンピの自生が多く、桐生の里（大津市桐生）では、これを利用した雁皮紙の生産が盛んだったようですが、現在では、成子紙工房のみが紙漉きの技術を継承して生産を行っています。ここで漉かれる雁皮紙は品質が良く、国宝級の美術品の修復や、宮中の歌会始に使われているそうです。

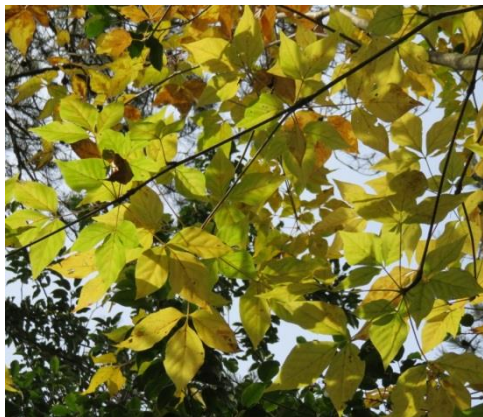
特に薄口の雁皮紙は「薄様」と呼ばれ、平安文化を支えた女性たちが懐に忍ばせ、詩想が浮かぶと「かな文字」で筆を走らせた料紙、つまり詠草用紙として使われたそうです。

桐生からほど近い石山寺では、紫式部が源氏物語の想を練ったとされているが、ひょっとしたら、源氏物語は桐生の雁皮紙に書かれたのではないかと……とロマンが広がります。しかし、桐生の里で雁皮紙の製造が始まったのは江戸時代末期からのもので、このロマンは辻褃

が合わないことになり、残念ながら撤回せざるを得ません。

＊

さて、話を元に戻して行程を進めましょう。



2枚の画像、左は3出複葉のタカノツメ、右は掌状複葉のコシアブラです。
どちらも黄葉しますが、よく見ると色が微妙に違うそうです。
タカノツメはレモンイエロー、コシアブラは薄い黄色。

そうこうしているうちに、竜王山の頂上横にある祠に到着。

八大竜王が祀ってある祠です。

竜は水の神様で、竜王山も御多聞に漏れず、雨乞いの山。

少し前までは、金勝の集落から夜中に松明を掲げて雨乞いの行列が続いたそうです。「はったいりゅうおう、あーめたもー」（八大竜王雨給う）と唱えながら、麓から竜王山へ続く道を松明の明かりが続いたそうで、幻想的な光景だったことでしょう。



コハウチワカエデの紅葉



ベニドウダンの紅葉

金勝山系では**アカガシ**が相当数見られます。

この画像もその一本。アカガシは本来一本立ちですが、この様に株立ちになっているのは、かつて薪炭林として活用した名残りではないか、との参加メンバーの大方の見解でした。

つまり、伐採した後の萌芽更新から、年数が経てこの様な立派な株立ちになった。



最後は、湖南アルプスからの絶景と奇岩怪石の紹介です。

最初に記述したように、湖南アルプスはほぼ全域が花崗岩で構成されているため、風化・浸食が激しくて、長い年月の間に不思議な形の岩があちこちに出現しました。

耳岩 →



← 重岩（かさねいわ）

国見岩 →





こちらが、本研修のハイライト、天狗岩。
右上の、上が尖った岩を天狗に見立てたらしい。
この岩の隣の岩に登り、昼食をとりました。



天狗岩から、西の方角の眺望。
近江大橋、プリンスホテルなどが見えます。
はるか向こうの山並みの、少し尖ったところが京都の
愛宕山。

この研修で観察できた他の植物は、ゴヨウマツ、サルトリイバラ、カナクギノキ、
アオハダ、ウメモドキ、シコクママコナ、ツルリンドウ など。

参加の皆さん、お疲れ様でした。

(報告 佐々木)